

少数民族白族の食文化・歌文化

— 中国雲南紀行 —

板 垣 俊 一

一昨年（2002年）8月末から9月始めにかけて、アジア民族文化学会主催の、中国雲南省洱源県のツービー湖で行なわれる歌会の調査旅行に参加した。ツービー湖は、省都昆明市の西北約470キロメートル、大理石で有名な大理市をさらに北上した所にある中国の少数民族白族の居住地にある湖である。そこに至る行程は、まず昆明から大理まで高速道路で約六時間から七時間、さらに大理から洱源県の町まで山岳道路のような道を二時間ぐらいかけて進む。道路は舗装されていて交通事情は想像以上に良かった。

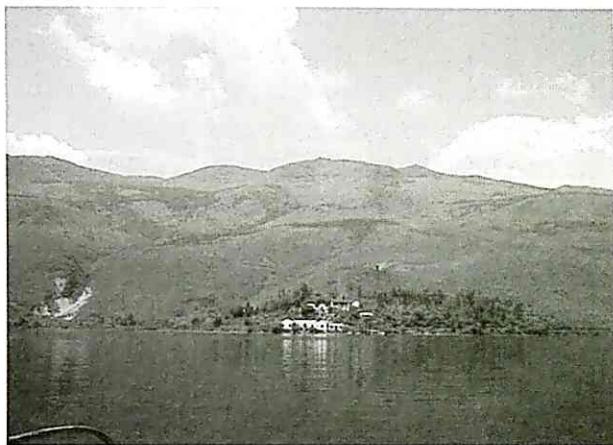
中国側で旅行の案内をしてくれたのは、雲南大学外国語学院東語系教授の張正軍さんであった。大学のマイクロバスを移動の手段として、張先生の細かな配慮により、私たち一行十七名はたいへん有意義な、しかも快適すぎるほどの旅をすることができた。



雲南省の地図

成田空港を発ったのは8月28日。途中族白族の本主廟などを幾つか見学しながらだったので、昆明・大理でそれぞれ一泊し、ツービー湖近くの宿、洱源県温泉賓館に着いたのは30日の正午ごろであった。

中国全土はおろか雲南省全体の地図上でも点にも表わされないようなこの湖は、実際に訪れてみると長さ六キロメートルもある大きな淡水湖であった。周囲を数百メートル以上はあろうかと思われる山々を取り囲んでいる。この湖の北西部



写真① 竜王廟がある場所の風景
(廟は湖岸の白い建物の少し上にある)



写真② 竜王廟の境内に集う人々



写真③ 湖岸の供物（線香・ご飯・卵・紙幣など）

いたがき しゅんいち

〒951-8155 新潟市関屋堀割町1-2 (自宅)

に、山の一部の尾根が次第に低くなって湖水に少しだけ突き出たようになっていところがある。そこが今回訪れた熊谷山（昔は熊が出たということから付けられた地名という）と呼ばれる歌会が行なわれる場所である。

8月30日から31日にかけては、ここにある竜王廟の縁日で、参詣者が大勢集まる。また祭礼の一環としてここでは男女の歌の掛合い、即ち歌会が行なわれることが、すでに工藤隆・岡部隆志著「中国少数民族歌垣調査全記録」（2001.）によって報告されている。このたびの旅も、両氏によって詳しく紹介された歌会の現地を実際に訪れ、会員各自がさらに詳しく調査を行なうことを目的としていた。

ツービー湖の周囲は高い山々を取り囲んでいるから、その地へ行くには湖の南岸から二、三十分かけて船に乗らなければならない。私たちは「水花」号と名付けられた小さな連絡船に乗ってそこへ渡った。湖水の水が流れ出る南岸の細い水路の水は汚れていたが、湖の中ほどに行くにしたがって水の色は「苾碧（ツービー）湖」と漢字で書くとおり美しい碧色となる。しかし、湖の名の由来は別にあるのだという。ツービーは白族の言葉で植物の名であった。今では草魚によって食べ尽くされ絶滅の危機にあるが、この湖水に自生する葉の大きな水草の名である。葉は水中に沈んでいて、茎は数メートルの長さで湖底に根をおろしている。花は、開く前の蓮の蕾に似ていて白く地味である。



写真④-A
ツービーの花



写真④-B
海草(左)とツービー(右)の花

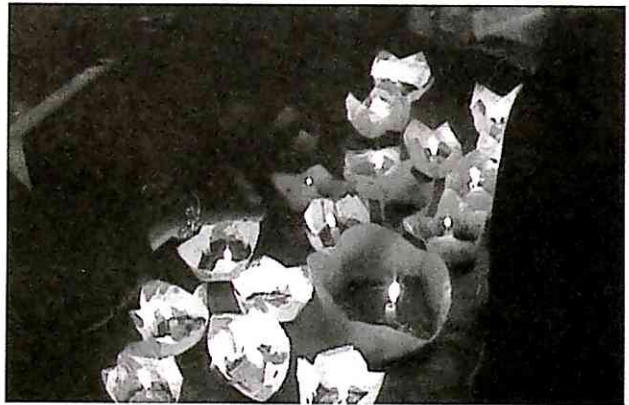


写真④-C
ツービー湖の鯉と草魚

この湖にのみ生える水草で食用として利用されているのは「海草」（これは聞き違いかも知れないし、現地白語の名称は失念した）である。これはこの地の特産品となっていて、南

の大理古城でも、また北の観光地麗江古城でも、この野菜の炒め物が食卓に出た。柔らかく、そしてまた歯触りもあって美味しい食材であった。ツービー湖の恵みは、このほかにも菱の実、草魚、鯉などがあってこの地方の白族の食生活に役立っている。

この湖の神である竜王を祀る竜王廟は、湖面から少し登った高台に建ついわば神社のような施設であるが、他に観音堂も有るし、また死霊との交流も行なわれる場所でもあり、廟の在る山全体が神仏習合的な聖地となっている。湖の水深は最大で十メートルという。それほど深くはないが、湖底には他界にいたる穴があいていると地元の人々は伝えている。祖先の霊が通う穴であった。また後世になって漢民族の風習が入ったものと言われるが、8月30日と31日の夜には、竜王廟の前で灯籠流し（海灯会）が行なわれる。30日の夜はその船に乗せてもらったが、暗い湖面に浮かぶ小さな蠟燭の光の群れを見つめていると、その日は死者たちの霊が他界から帰ってきたように感じた。



写真⑤ 海灯会（灯籠流し）の灯火

昼、竜王廟の裏山では、白語でサイヨウと呼ばれる女性シャーマンの仏寄せが行なわれていた。近親を亡くした女性がその霊を寄せてもらい、感余って泣き叫ぶ光景をみたときは私も別の意味で感動した。つまり日本ではもう見るのが困難になったミコの姿がそこにあったからである。このシャーマンは数人来ていて死者の供養をしてやっている。依頼主は主に女たちだった。



写真⑥ 死霊をよせる巫女（中央）と聞き入る女性

白族の村は湖水の西岸にかなり距離を置いて幾つかあった。湖水に面した山肌には樹木がわずかに生えているのみでほとんど低木と草地である。雲南省の全体は知らないが、昆明から西北部にかけて見たところでは、総じて樹木が少なくわずかに草が生えている程度の山々が連なっていた。そのため、雨による土砂の流出がはげしく、川という川の水は、濃い赤茶色か黄褐色に染まっているのが異様に目立った。これは開発のために木を切ったからだとも言われている。緑化のために、ところどころ外国産のものと思われるユーカリの木が植えてある。乾燥に強く成長が早い木だからという理由らしいが、いかにも虚しい努力という気がした。

その土の色で興味深かったことは、民家の壁色がそれぞれの地方々々で大地の色と同様だったことである。赤茶色の強い土が見られる地方ではその色の煉瓦の民家、また黄褐色の土が見られる地方ではその色の煉瓦の民家という具合に、土の色と民家の壁の色が一致している。これは日干し煉瓦を使って壁を作るところから来ていると思われるが、かつては中国に限らずどこにおいても人間の生活がその土地と不可分であったことを端的に教えてくれるかのように感じられて印象に残る光景であった。



写真⑦ 雲南省北部の少数民族の民家（麗江に至る山岳道路で）

ちなみに、白族という名はこの民族が白色を好むからといわれ、彼らの民家の壁は漆喰のようなもので白く塗られ、さらに黒色の塗料で唐草文様や山水画に似た美しい図柄が描かれている。

ツービー湖の水面は標高二千メートル前後と思われる。水田は無い。高く聳える廻りの山のかなり高い斜面にトウモロコシが栽培されている。人の食料よりも家畜の飼料だという。夕方、岸辺の新道を、女たちが背負い籠に草をいっぱい詰めて家路についていた。これも家畜の飼料であろう。日本人にとっては懐かしい光景である。四、五十年前までは県内の農山村でもよく見られた。田畑の仕事を終えて夕方野良から上がって家路につくときには、同様に牛や馬のかいばを背負って帰ったものである。

ところで旅行者が一般に関心をもつものといえば食べ物であろう。特殊な構造の鍋に水を入れずに蒸気で蒸した鶏のスープは雲南地方独特の料理で、たいへん美味しかった。その



写真⑧ 白族の民家に描かれた図柄の例（ツービー湖北岸の村）



写真⑨ 白族の民具 背負い籠と背あて
(背あては写真⑥のミコを聞く女性も背負っている)



写真⑩ 刈り草を背負って家路につく女たち

他は野菜の炒め物が多い。日本の食材と共通するものとして目についたのは、百合根・蓮根・自然薯・夕顔（トーガン?）・クワイ・枝豆・竹の子その他多くの茸類であった。特にきのこ類は秋のシーズンであったため種類も豊富だった。雲南西北部の山々は樹木が少なく荒涼としていると言ったが、北部麗江に近づくにつれて目立ったのは松林である。何か種類は知らない。昆明に近い楚雄の「山菜王国」という店で昼食をとったときは、テーブルに松葉が敷き詰められていて、その葉は長く20センチほどあり、かつ三葉だった。

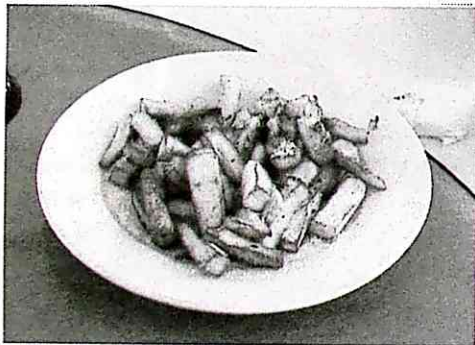
雲南の松林には沢山の松茸が生えるというが、中国の人々はその独特の香りを嫌って食べる習慣がなかった。現在は日本に輸出するためにかなりの量が採集されているという。



写真⑩ 種々の茸類 (昆明市のきのこ料理店で)

青菜もよく食卓にのぼったが、チンゲン菜に似たもののほかは何か分からなかった。豆腐やコンニャクも勿論ある。大徳寺納豆のようなものも野菜の炒め物に入っていた。しかし日本の食文化との、照葉樹林帯文化としての共通性は思ったほどではなかった。そもそも照葉樹林が少なかったのである。大理の山で少し見かけたほかは茶樹もほとんど見かけなかった。

逆に我々の食物と異なるものとして目にとまったのはチーズの揚げ物である。このことは雲南少数民族の文化に北方の牧畜民的な要素があることを示しているのではないだろうか。



写真⑪ チーズの揚げ物 (洱源県の温泉賓館で)

ちなみに同じ雲南でも、西双版纳を含む南部の熱帯地域は自然の野性野菜が豊富な所で、次の新聞記事によれば291種を数えるという。たまたま、今回訪れたとき現地で入手した小新聞に雲南地方の食材に関する記事が出ていたので、部分的に引用してみたい。新聞紙名は「香港 文匯報」。発行日は、2002年8月30日である。

雲南の熱帯地方には利用可能な野性野菜が291種あり、その中で食用となるのは「草本類」が最も多い。

雲南における熱帯地方の、大多数の地域では、植物が年間を通して成長し、ほとんどの野性野菜が比較的長い

間収穫できる。西双版纳だけでも芭蕉花や野芹菜など収穫できるものは97種もあり、5月から10月にかけての雨季には、さらに臭菜・竹の子・蕨菜の類が180種もとれる。

野性野菜は食べても美味しく、汚染も無く、そのうちのある種の物は健康によい薬用効果もあって、これによって人々にすごく喜ばれ、好まれているのである。滇南地方の臭菜系統・芭蕉花系統・大白花系統、また滇東南地方の石榴花系統・攀枝花系統は、すべて当地の美味しい名産品である。

調査によれば、雲南の野性野菜には種類が多いものもあれば、少ないものもあり、すでに国家によって絶滅の恐れのある稀少植物に入れられているものもある。専門家は、野性野菜がたいへん重要な資源植物であること、その中には多くの薬用植物が含まれており、また多くの種類が現代の栽培野菜の祖先になっていて、野菜の育種にとっても重要な基礎的資源となっていることを認めている。これによって、近年各地で野性野菜の開発の積極性がたいへん高まっているにもかかわらず、雲南ではこれまでずっと適度な開発が行なわれてきた。野性野菜が販売市場に占める割合は、野菜総量の1%—30%であり、西双版纳から国内の大・中都市部に売りさばかれるほかは、基本的にその地区の市場で販売されている。

目下、雲南の野性野菜の開発では自然の風味と健康食品としての特色を保持することを中心としながら、あわせて耕作地を元の森林に戻し天然林を保護して、適度に「木本類」の野性野菜を移植することが行なわれている。

同時にまた、薬食兼備の種類の健康成分とその効用を研究し、良質の種類を選定し、そして自然環境にならい、野性状態を保持して、公害のない栽培技術を研究することに力を入れている。

(翻訳にあたり著者にとって難解な部分は県立新潟女子短大で中国語教育を担当している高久由美先生のご教示を仰いだ。)



写真⑫ 香港 文匯報

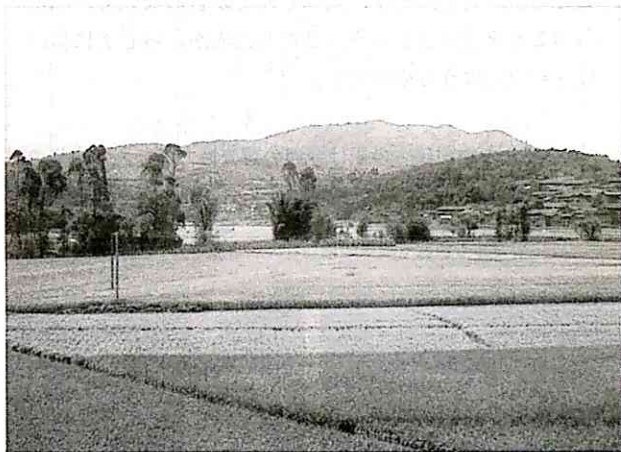
記事の見出しには「保護中開發形成旅遊飲食中的特色地方菜系」(自然保護の中で進む開発——観光料理における特色

ある御当地料理となるために)とあるが、現在、農薬汚染が社会問題化している中国では、野性野菜が見直されていることを知る資料として興味深い記事である。

ところで、日本人のこだわる稲作はどうであろうか。これも照葉樹林帯文化とされているものである。雲南のかなり北部に至るまで、平野部における水田耕作はたいへん盛んであった。次のような写真の光景は、日本の田園風景と見紛うほどよく似ているだろう。



写真⑭ 大理市北西部洱源县の水田風景



写真⑮ 楚雄市郊外の農村風景 (この辺りはイ族が多いという)

米は日本の米と同じく粒の短い米であった。ご飯は水分が少なく、あたかも水加減を少なめにして炊き損ねたようなパサパサの状態である。二千メートル近い高地だから沸点が低いということも考えられるが良く分からない。三道茶を飲みながら大理で食べた「菊屋」という日本料理店のご飯は、我々の食べる水分の多いご飯だった。自然的条件はともかくパサパサのご飯は地元民の食文化であることは間違いない。

また、中国では生ものは絶対に食べないと言われる。食材の多くは油脂を使って調理される。これも一つの食文化であるが、その淵源として肉食の牧畜文化が考えられないだろうかと思ってみた。油脂は、植物性の油よりも動物性の脂のほうが牧畜民にとっては手に入れやすいからである。そんな想像はチーズの揚げ物を見たことにも依っている。また白族は彼らの伝統的な信仰である本主信仰での祈りには、必ず鶏の生贄を供える。魚以外の動物供犠が山村のマタギにしか見



写真⑯ 大理市の本主廟で祈る人々
(願い事を書いた紙を香炉にいれて燃やす)

ることができない日本人の風習とはこれも異なっている。

さて、話をツービー湖竜王廟の縁日に再び戻せば、この日は竜王廟へのお参り、観音堂へのお参り、巫女の仏寄せによる死霊との交流などの宗教行事が、主に年配の婦人たちによって行なわれるとともに、年に一度の歌い踊る遊楽の場ともなっている。



写真⑰ 竜王廟の後方にある梅林の広場で踊る女性たち



写真⑱ 白族の民族衣装を着た女性

今回調査を行なった歌会も、このような中で行なわれる行事であった。歌会とは男女が一对一で恋歌を掛合う遊びである。日本の古代にも「歌垣」と呼ばれるこれに似た風習があ

った。男女は若者たちとは限らない。実際に行なわれていた例であるが、中年の男女の歌掛け、男性老人と中年女性との歌掛け、また老人同士の歌掛けなどもあった。男性老人と中年女性の歌掛けでは、「年寄り私の相手ではない」などと女性が老人をからかうところに一つの特徴があり、廻りで見ている人々はその妙味を楽しんでいる。また老人同士の歌掛けにも出会った。お爺さんとお婆さんが仲良く草むらに座って歌掛けしていたのだが、我々がつい興味深げにビデオカメラを向けるとお婆さんは恥ずかしそうな様子で歌を止めてしまった。一般的には歌に自信のある男女がその巧みさを聴衆に披露する気でやって来るから、取り巻く人々の前で少し離れながら堂々と掛合う。そんな中で、私がいたく感動した例があった。若い男女の歌掛けである。山の斜面にくつろいでかたまっていた男性五人、女性三人のグループの中にいた一番若い二人が歌を掛合っていた、その現場に近付くことができたのである。これもビデオカメラを向けるとこちらを意識するふうだったので、そしらぬふりをして彼らの近くに座り、その様子をそれとなく観察し、隠し撮りでビデオを撮った。そのとき、実に万葉の世界に入ったような感動を私は覚えた。



写真⑱ 歌掛けする若い男女（ツービー湖畔竜王廟の歌会）

次に歌会の歌の内容をほんの少し紹介したい。残念ながら、歌詞は私が感動した上記の若い二人のものではなく、別の男女の例である。二人はともに既婚者であるようで、女性は子ども連れだった。男は自分の妻はもう死んだなどと言っているが、事実なのか女性の気を引くための嘘なのか分からない。相手の女性はそれを嘘とみなして歌い掛けている。そこが恋の駆け引きとして面白いところであり、周囲に多くの見物人がいる中で、今二人が恋をすればこのように思い合う、といったふうに歌の掛合いをする。だから謂わば、その場の状況は一種の虚構のようなものでもある。このような歌詞が、男女一区切りずつ同じメロディを繰り返しつつ、実際の掛合いは何十分も続く。歌詞は即興で歌い、男女ともその末尾は決まって「フーアーフー」という意味のない句で歌い納める。次に引用するのはそのごく一部である。

女：あなたの妻が亡くなったのは本当のことですか、嘘のことですか。人の噂を聞かないでください。あなた

は自分の妻が早く死んでほしいなどと言ってはいけません。奥さんが亡くなったなどと言わないでください。仲良くするのは、私たちだけの問題です。

男：仲良くするって？ 私からも言いたいことがあります。妻が亡くなったというのは本当です。余計なかんぐりは無用です。これは本当です。私のことをどう思いますか。よい返事をしてくれなければ、胸に剣が刺さったようで、悲しいです。

女：お互いに気があれば少しずつ仲良くしましょう。いっしょに生活するのは長い時間。今だけではないのですから。人の噂は気にしないで、私たちの愛情を大切にしましょう。あなたは寂しいといいますが、私だって寂しいのです。

男：お互いに仲良くするのは、これから長いことです。百も一から数えます。私はあなたと別れても、あなたについて行きます。今日、私たち二人は出会いました。どこまでもいっしょに行動しましょう。私は本当のことを打ち明けました。心配しないで下さい。

女：今日のことは私の気に入りました。ちょうど私が行こうとするときに、あなたが目に入ってきました。一人は右から、もう一人は左から来て出会うことは、良いことです。奥さんとか、旦那さんとか言わないで、私たちのことを歌いましょう。私たち二人がいっしょに歩けば廻りの人はうらやまします。

*白語から中国語への訳は今回の調査協力者である白族の民俗研究者施珍華さん、中国語から日本語への訳は前記雲南大学の張正軍教授である。



写真⑳ 歌の掛合いをする男女（合成）
（二人の距離は10メートルほど離れていて、男性の側には男たちが、女性の側には女たちが集まっている。）

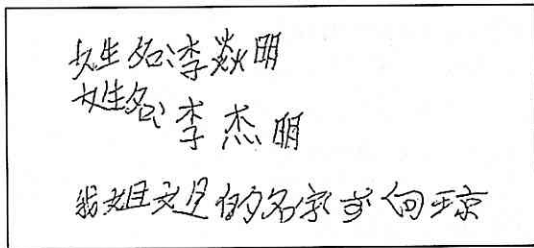
社会主義国中国のなかで、ツービー湖付近の白族はこのような伝統的で素朴な生活文化を今に伝えている。それは文明の中心地から遠く離れていたことによるだろう。しかし近代化は次第にこの辺りにも迫ってきている。湖の北岸にある村の民家を訪問した時、居間には大きなテレビが置いてあった。湖岸から船を上がって村の中に至る百メートルあまりの道は、梨の木の林の中にあつた。梨の木は高く自然のままに生

えていて、ちょうど大きくなりかけた実があたり一面に落ち、甘い香りが漂っていた。桃の木ではなく梨ではあったが、木漏れ日の中をどこか桃源郷に迷い入ったような気分であった。しかし、今後テレビは、この村にも改革開放による現代中国の都市文化を否応なく浸透させてゆくだろう。

元来白族は文字を持たない民族であり、今でも漢字を読めない大人がいるが、子どもたちは学校で民族の言葉と異なる中国の標準語を習い、漢字を習っている。この子たちが大きくなる時、竜王廟の祭りはどうなるのだろうか。



写真② 白族の子ども（李焱明君と李杰明君の兄弟）



彼らには姉（姐姐）もいるらしくその名も教えてくれた。
少数民族には中国の一人子政策の規制が適用されない。



竜王廟祭の会場に入るには入场券が要る

